慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | アメリカ合衆国におけるliberal educationの史的展開に関する研究 : St. John's Collegeの「ニュー・プログラム」(1937年)に着目して平成18年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告) |
| Sub Title | |
| Author | 安藤, 真聡(Ando, Masato) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2007 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 :<br>人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007. ) ,p.145- 148 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成18年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000064-0145 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 平成18年度
# 大学院高度化推進研究費
# 助成金報告

## アメリカ合衆国における liberal education の史的展開に関する研究
### ——St. John's College の「ニュー・プログラム」(1937年) に着目して——

安　藤　真　聡

**1. 本研究の目的**

1991年の大学設置基準の大綱化以降，我が国では教養教育論議が活発化し，こうした論議の高まりと共に，近年，リベラル・アーツ (liberal arts) が頻繁に言及されるようになってきている。例えば2000年の大学審議会答申では，広い視野をもった人材養成の観点から，「米国におけるリベラルアーツ・カレッジのような教養教育を中心とした幅広い教育プログラムを持つ学部への改組転換を促進」する必要が説かれ，また，同年の教育改革国民会議最終報告でも，「学部では教養教育（リベラルアーツ教育）と専門基礎を中心に教育を行う」ことが提言されている。このような答申の流れと軌を一つにするように，一般教養教育改革に際して「リベラル・アーツ」を標榜する大学は枚挙に暇が無い。しかしながら，こうして我が国で頻繁に言及されるリベラル・アーツをめぐっては，論者による理解と誤解が交錯し，その構成概念について明確な合意が得られているとは看做しがたい状況にある。こうした交錯した現状を紐解く上で，リベラル・エデュケイション (liberal education) の概念史の吟味は不可欠である。

アメリカ高等教育は，19世紀末から20世紀前半，研究型のドイツ・モデルのインパクトを受け，「カレッジ」から「ユニヴァーシティ」へと変貌を遂げたと理解されている。D·O·レヴァインが指摘するように，この時代，科学技術の進展とともに研究領域の細分化が進むとともに，リベラル・アーツの名の下に括られるカリキュラムが飛躍的に増大する。結果，リベラル・アーツ・カレッジのファカルティでさえ，リベラル・アーツの意味を満足に説明できないという事態が生じることとなる。こうしたアメリカ高等教育の揺籃期に，リベラル・エデュケイション/リベラル・アーツ概念の再定義に自覚的に取り組んだ論者の一人が，M·J·アドラーであった。

アドラーは，1920年代，コロンビア大学で導入された（古典的名著の講読と討議を中心とする）「ジェネラル・オナーズ」コースに学び，1930年代にはシカゴ大学の大学改革に関わった人物として知られている。本年度は，グレイト・ブックス・プログラムの展開に尽力したアドラーの言説に着目し，20世紀前半，特に戦間期におけるリベラル・エデュケイション概念の変容の一端を解き明かすことを試みた。本報告書では，本年度の研究成果の中核をなす，口答発表「M・J・アドラーのリベラル・エデュケイション」(教育哲学会第49回大会，於東京大学）を中心に，その概要をまとめることにしたい。

**本研究の概要**

アドラーの提唱するリベラル・エデュケイション概念は，人間の本性をめぐる考察を媒介とし，民主主義社会を下支えする基盤として構造化されている。この点，アドラーの言説をまとめてみると，以下のように整理することができる。

①人間の本性は，理性と知性の所持にある。②故に，人間の教育の基礎は，理性の訓練と知性の涵養におかれるべきである。③人間の知的な生活は，コミュニケーションによって成立するコミュニティの中で営まれている。従って，理性の訓練は，コミュニケーションの技芸であるリベラル・アーツ，すなわち読み方，書き方，聞き方，話し方，考え方などの技芸 (arts) の修得によって達成される得るものである。④また，知性の涵養には知識と知恵を与え，真理を知らせ，熟達した思想を提供する必要がある。従って，過去から現代に至るまでのすべての分野における傑作選であるグレイト・ブックス（以下 GB と略す）が，リベラル・エデュケイションを構成するもう一つの基礎的な要素となる。⑤GB とは，リベラル・アーツ，すなわち読み方・書き方などの技芸を教えるとともに，それを通して各々の世代が知性を涵養するための，文化的な伝統を構成するものである。⑥リベラル・アーツの修得と GB を読み込むこうしたリベラル・エデュケイションの訓練こそが，知性と理性を解放し，批判的な精神を熟達させ，また民主主義を維持・発展させることができる。

本研究では，先行研究で等閑に付されてきた，③の「技芸」としてのリベラル・アーツ概念定義と，⑤のこうした「技芸」教授の媒介項としての GB の位置づけに着目した。リベラル・アーツを「技芸」と定義し，GB をその「技芸」（特に「読み方」の技芸）を練磨する手段と位置づけることによって，GB という書物の意味づけが変容する。そこにこそ，アドラーのリベラル・エデュケイション論の核心があり，また，批判的精神の熟達，民主主義の維持・発展 (⑥) を導出する上で，一つの重要な意味をもつと考えるからである。

アドラーは，「学びの順序」と題した論稿において，「リベラル・アーツの修得は，基礎的な教科内容の修得に先行するべきである」と述べ，リベラル・アーツは，そもそも教科内容とは異質のものであると言明している。彼はその一例として，logic を一つの教科内容と位置づけるカレッジ教育に異を唱え，以下のように論じている。

logic は，二つの意味において解釈され，また，与えられ得るものである」。一つは，「純理論的な科学」，すなわち教科内容としての logic であり，もう一つは，「リベラル・アーツを構成する一つの技芸，すなわち精神の統制と調整のための規則の一つの体躯，一つのオルガノンとしての logic」である。科学としての logic は純粋な思考を題材として扱う。それに対し技芸としての logic は，grammar や rhetoric と結合してはじめて，知的な創造力や記号を用いた思考，そして情念の推進力に抗う作用を統制することができる。「logic が技芸として考究されるならば，grammar と rhetoric という二つのリベラル・アーツと分離させることはできない」。何故なら，この三つの技芸はそもそも三位一体であり，それらは相互に引き離されてしまうと，崩壊し，無力になってしまうからである。

こうして技芸としてリベラル・アーツを再定義したアドラーは，その教授方法について以下のように説明している。そもそも「技芸とは習慣のこと」であり，故にそれらは技芸が統制する根本的な実践によって培われなければならない。諸技芸の規則は，繰り返し作動させられることによってはじめて「習慣を形成する」と。アドラーは，ここでようやく，リベラル・アーツを習慣として修得させるための媒介物として，教科内容を位置づけ，GB こそが，こうした媒介物のなかでも，最も有用であると主張して

いる。

本年度は，リベラル・アーツの中でも，「言語についての最も基本的な能力」として，アドラーが最重要視する「読み方」の技芸を取り上げ，彼の考える「読み方」の技芸の構造と，何故，「読み方」の技芸を修得させるための素材として GB が有用であると考えられるのか，分析を進めた。

アドラーは，二つの視点から「読み方」の技芸の規則の理論化を模索している。第一に，彼は「読む(read)」という語の語史を紐解きつつ，「読むということは，沈思するということと関わりがある」と指摘する。すなわち，「読むということのあまり知られていない意味の一つが，考えること，推量するということ」なのであり，reading という言葉には，「言葉や，その他の実体的な記号によって示されている意味を理解し，解釈するプロセス」が含まれるというのである。こうした語史理解を踏まえるならば，読むという行為は本来的に消極的では有り得ず，すべての読むという行為はアクティブな思考のプロセスであると考えられることになる。さらにアドラーは，読むという行為は「書物とその読者間の対話」のプロセスであり，「一般的な対話においてあてはまることは，書物が読者に語りかけ，読者が書物に返答するという特殊状況においてもあてはまる」と考える。

このような考察を前提とした上で，「読み方」の技芸の規則を，アドラーは，三段階に分けて理論化する。第一段階が「書物の構造分析」，第二段階が「書物の内容解釈」，第三段階が「書物の批評」である。アクティブな思考と対話のプロセスとして読むという行為を考察するアドラーにとって，第三段階のプロセスが，一つの重要な意味をもつ。何故なら，読者が書物の内容を理解するだけでなく，自身の批判的な機能を行使しない限り，それは真の意味でアクティブな思考ではなく，また，双方向的な対話として成立しないからである。こうして「よく読むことの技芸は，よく考える，すなわち明瞭に，批判的に，自由に考えるという技芸と密接に関わる」ことになる。

このような「読み方」の技芸の規則に鑑みると，こうした技芸を習慣として修得する上での媒介物として，「読みやすく加工された読み物」であるテキストブックは，必然的にその価値を大きく減ぜられることになる。何故なら，思考と対話の契機が脆弱なテキストブックでは，「読み方」の技芸を練磨することができないからである。このようにして，アクティブな思考と活発な対話を喚起し，「読み方」の技芸を修得する上での素材として，GB が浮かびあがってくることになる。何故なら GB というものが，読者に思考と格闘を要求し，知的な挑戦を投げかけるものだからである。

批判的思考と不可分一体の形で結合した，「読み方」の技芸を修得するための素材として位置づけられることにより，GB という書物には，二重の意味が付与されることになる。一つは，既存の知識や情報，思想を伝達する媒介物としての書物であり，もう一つは「読み方」の技芸によって批判的に省察されるべき対象としての書物である。こうした二重性の付与により，GB は，既知の真理を伝達する権威の源泉としての閉じられた書物から，不確定性を包摂した，多様な意見や批判に開かれた存在としての書物へと，新たな意味世界を切り開かれ，また，GB を読むという行為には，民主主義社会における主体的且つ批判的な主権者を養成するためのプロセスとしての意味合いが付与されることになる。

そもそもアドラーによれば，「民主主義とは，自由人によって構成される社会」のことであり，民主主義社会で想定される市民とは，「公益に影響を与える問いについて，批判的且つ独立した判断を下す」主体のことであった。このような主体は，国家や社会生活の中で多様な他者と出会い，さまざまな事物を読み聞きし，時にはそれらを批判的に省察することによって，自らの見解を定め，行動を決していかなければならない。アドラーは，こうした国家や社会生活の中で出会う他者の精神と，GB の著者たちの精

神をパラレルなものと考え，GB を批判的に読むという行為は，将来の市民生活に向けての一つの有効な訓練になると考える。この点，彼は以下のように論じている。「民主主義社会における市民は，自分たち自身のために思考することができなければならない」。「彼らは，他者と明瞭にコミュニケートし，あらゆる種類のコミュニケーションを批判的に受け取ることができる必要がある。読み方の技術と GB を読むということが，明らかに唯一の手段であるというのは，まさにこうした目的のためである」と。

なお，アドラーがリベラル・エデュケイション論の再定義を試みた 1930-40 年代は，おりしも高等教育の「マス化」，ナチズムの台頭期と重なり合う。ファシズムと民主主義の相克の問題，こうした世界情勢の中で，大衆化の進む高等教育の担うべき機能という問題は，考察されるべき課題として彼の眼前に立ちはだかっていた。彼がリベラル・エデュケイション再定義に際して拘り続けた，批判へのまなざしは，こうした課題への一つの回答としての意味合いも帯びていた，と指摘することができよう。

本年度の研究成果は，時間的な制約もあり，戦間期のリベラル・エデュケイション論のなかでも，アドラーの言説の概要をときほぐすに留まっている。掲げた研究課題の大きさに照らしても，今後，アドラー以外の論者によるリベラル・エデュケイション論にも焦点をあてること。また，そうした言説分析的な研究の蓄積を踏まえた上で，既存のリベラル・エデュケイションをめぐる概念史研究を，再度批判的に吟味し直す作業が必要になるだろう。今後の継続的な課題としたい。

### 主要参考文献

Adler, Mortimer J., 1939, "The Crisis in Contemporary Education," *The Social Frontier*, 5: 140-145.

Adler, Mortimer J., 1940, *How to Read a Book: The Art of Getting a Liberal Education*, New York: Simon and Schuster.

Adler, Mortimer J., 1977, *Reforming Education: The Schooling of a People and Their Education Beyond Schooling*, Boulder: Westview Press.

Levine, David O., 1986, *The American College and the Culture of Aspiration, 1915-1940*, Ithaca: Cornell University Press.

松浦良充，2004，「『リベラル・アーツ』をめぐる理解と誤解—比較大学・高等教育史の視点から—」『教育文化』13: 16-40.

# 顔刺激における予期からの逸脱認識の神経活動

## ——脳磁図による研究——

石　津　智　大

人間には，顔や身体像などを容易かつ瞬時にそれと認識する能力がある。またオドボール課題や事象関連電位の一つである Mismatch-Negativity 等で示されるように，注意を払っていない状態でも人間の脳は通常とは異なった刺激（予期からの逸脱している刺激）へ，自動的に反応できる仕組みを持つ。このような無意識的，自動的な判断，注意の情報処理は，その後の自覚的な認識の基盤となっていると考えられる。